医療の未来とDOHaD研究への期待

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2015-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井村, 裕夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/2820

DOHaD 研究（ISSN 2187-2597）
2014 年 第 3 巻 第 1 号　8 頁

第 3 回日本 DOHaD 研究会学術集会 抄録集

【特別講演Ⅰ】

医療の未来と DOHaD 研究への期待

（公財）先端医療振興財団理事長
井村　裕夫

現在世界の多くの地域で人口構成の高齢化が進んでおり、心筋梗塞、２型糖尿病などの Non-communicable Disease(NCD)が発展途上国においても重要な健康問題となりつつある。我が国では少子化が同時に進行し、高齢者の医療・福祉をどう持続可能な形に変えていくかが問われている。

NCD は一般に遺伝素因と環境因子が相互作用して発症すると考えられている。遺伝素因については全ゲノム関連解析を中心として研究が進んでいるが、まだ不明の点が極めて多い。特に多因子疾患では、遺伝子発現の調節機構の関与が重要と考えられており、その意味で環境因子が注目されている。環境因子としては胎生期、一部では受精前の因子が後年（中年以降）の健康に影響する事実が、疫学的研究や動物実験で指摘されており、進化生物学でいう予測適応反応（predictive adaptive response）と考えられている。したがって予測と後の環境との間にミスマッチが起こった時、発症すると想定されている。そのメカニズムとしてエピジェネティックな変化が重視されており、その一部はさらに次の世代に伝えられる可能性が大きい。そのために、今後 DOHaD 研究を一層進めていく必要がある。

これと関連してヘルス・ケア―なあり方も変えていかねばならない。従来は中年以降に成人病検診をして早期発見・早期治療を目指してきたが、胎生期、さらにはそれ以前の健康も重要と考えられ、生涯を通したヘルス・ケア―の時代となりつつあると言えよう。